

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：山崎 喜比古

研究課題名：大学生における社会的排除/包摂と逆境下成長の過程と要因に関する縦断的研究

取り組み状況

取り組み状況について、本研究の 4 つの実施計画に即して報告する。本研究の 4 つの計画は、以下のものであった。第 1 は学生調査の実施であり、第 2 は卒業生現況調査との連携、第 3 はデータの解析、第 4 は研究成果の公表等である。

第 1 の学生調査の実施については、本学の新生を含む在校生全員（約 4,000 名）の調査を実施した。本調査では、これまでの分析結果を反映しながら調査項目の見直しを図り、学生像を把握する目的で 3 つの項目群を設定している。3 つの項目群は、①学生個人の状況や外的環境を調べる項目群（アイデンティティ、Sense of Coherence、ソーシャル・キャピタル等）と②大学や学習に対する姿勢についての項目群（学習動機づけ、日本福祉大学スタンダード「4 つの力」等）、③メンタルヘルスに関する項目（K-6）である。そして、本年度は、逆境下成長を把握するために、従来の乗り越え体験に関する調査項目を発展させた困難対応経験に関する調査項目を追加した。

第 2 の卒業生現況調査については、本学ではおよそ 5 年ごとに実施されており、2015 年度に実施された。この機を捉え、調査実施準備段階に、担当事務課室と調整を行い、本調査結果と在学中の状況（データ等）と突き合わせて分析する同意文の追加を行った。

現在、同窓会等、担当事務課室によって、データパンチ・クリーニングが行われており、2016 年度以降、在学時代の状況と卒業後のキャリアパスとの関連等についての分析を進める基盤をつくることができた。

第 3 のデータの解析については、主に以下に示す 4 つの解析を行った。それは、①縦断データを用いた GPA の変化と動機づけの影響、そして、②退学学生の特性分析、③大変な出来事を乗り越え

た経験を通じた成長感、自己確立に及ぼす影響、④サークルの参加状況とストレス対処力、うつ・不安感との縦断的関連性である。

第 4 の研究成果の公表等については、上記 2 つのデータ解析について学会発表等に向けた取り組みを行った。③大変な出来事を乗り越えた経験を通じた成長感、自己確立に及ぼす影響についての分析結果は、日本発達心理学会へのポスター発表にエントリーし、2016 年 4・5 月に報告する予定である。また、④「大学生が参加する部・サークル活動の種類とストレス対処力、うつ・不安感の縦断研究：2 年間（3 時点）の追跡調査に基づく分析」については「体育学研究」に投稿した。

その他、シンポジウムの開催や学内に向けた報告書を作成した。特に、2015 年 7 月に開催された公益社団法人全国大学体育連合東海支部主催の「多大学学生パネル調査構想に関するシンポジウム」（於日本福祉大学名古屋キャンパス）では、縦断データを用いた GPA の変化と動機づけの影響等を報告した。さらに、IR 推進室との連携による本研究の推進について、2016 年 3 月に開催された「大学教育改革フォーラム in 東海 2016」（愛知大学）において、「日本福祉大学における IR 機能構築に向けた到達点と課題」として報告した。

そして、2015 年度末には、データ解析等の成果を「2015 年度版学生像に関する分析報告書」としてまとめ、学内関係諸機関に報告していく予定である。

研究成果の内容

本研究の本年度の主な成果は、以下の 2 点である。

1 データ解析による研究成果の蓄積

データ解析による本年度の研究成果としては、以下の 4 点が挙げられる。なお、各分析の結果に

については、本学で発行している「学生像に関する調査分析報告書」に掲載している。特に、3)、4)については、論文化を目指す。

1) 青年期後期における逆境経験がそれを通じた成長感、アイデンティティに及ぼす影響

「逆境経験の大変さ感」と「うまく対応できた感」に着目して行われた本分析結果等については、第27回日本発達心理学会(2016年4・5月)にポスター発表を行う予定である。

2) 大学生が参加する部・サークル活動の種類とストレス対処力、うつ・不安感の縦断研究

2年間(3時点)の追跡調査に基づく分析が行われた。本分析結果等について、日本体育学会の機関誌である「体育学研究」に投稿した。

3) 縦断データを用いた GPA の変化と動機づけの影響

GPA と学習動機づけの関連では弱いながらも、自らの判断で学習している学生ほど GPA が高く、やらされている感覚で学習を行っている学生ほど GPA が低い。また、学習内容への興味から生じる内発的動機づけが成績に影響するのは3年生であり、良い評価を得たいから勉強するという取り入れ動機づけが学年を問わず GPA に影響していた。

4) 退学学生の特性分析

退学学生は、自己確立(アイデンティティ)の拡散(得点が低い)やソーシャル・キャピタルが低い傾向が確認された。また、学習動機づけの面では、外発的な学習動機づけ(怒られるから)が高く、同一化動機づけ(重要だから)、取り入れ動機づけ(恥ずかしいから)が低くなっていた。

2 分析データベースの充実

本研究に活用可能な学生調査分析データは、本年度終了時点で2013年度以降の3年分が蓄積されたことになる。この2016年度の春で4年分となり、1学年分の学生の4年間の変化を追跡できるようになる。

特に本年度の取組みで、新入生調査においても在学学生同様の学生像指標が追加されたことで、入学時期から4年次の春までのデータの獲得が可能

になった。さらに、先述の通り、卒業生現況調査との連携に着手できたことにより、今後、学生の卒業後のデータ蓄積も可能となった。本研究が目指す本学在学中と卒業後30年間の追跡を可能とするデータ蓄積に向け、大きな前進ができた1年であった。

なお、2015年度に、文部科学省科学研究費(挑戦的萌芽研究)補助金の申請を行った。申請書の作成にあたっては、本研究計画書に、研究の斬新性・チャレンジ性の強調を図り、研究課題の波及効果についても検討を行った。その結果、文科省科研費の採択を受けるに至った。

今後は、研究実績を蓄積しながら、多大学を含む大規模な学生調査と卒業後の状況を把握可能とするデータベースと多分野研究者による研究体制を構築し、全国を代表する大学生の成長過程と要因に関する縦断的研究へと発展させていきたいと考えている。